

- 2933
- 16) O. KUBASCHEWSKI and C. B. ALCOCK: Metallurgical Thermochemistry, 5th Edition (1979), p. 378 [Pergamon Press]
- 17) C. WAGNER: Metall. Trans., 6B (1975), p. 405
- 18) 水渡英昭, 井上 亮: 鉄と鋼, 69 (1983), A25
- 19) Lange's Handbook of Chemistry, 11th Edition, ed. by J. A. DEAN (1973), p. 9-8
- 20) 月橋文孝, 松本文明, 佐野信雄: 鉄と鋼, 68 (1983), S175

## コ ラ ム

### 高炉屋は獣医でもあるのか?

#### ——流高炉屋の幅の広さ——

従来より冶金屋は“何でも屋”と言われてきた。特に高炉屋はその代表であり、化学、物理学は言うに及ばず、伝熱工学、流体力学、熱力学、土質力学、粉体工学等々あらゆる学問領域に精通しておらねばならない。揚句の果てはコスト計算に長けた経済学者であることを要求されている。10000 t/D の高炉で燃料比を 1 kg/t-pig 低減すれば 1 億円/年という膨大な利益を生むことができるからだ。

また、高炉屋は最高の医者であることをも要求されている。患者の Throat (炉喉) を Materials (原料) がうまく通っているか、Stack (炉胸) で食べ物がつかえて胸やけしはしないか、内臓に出来物・はれ物 (付着物) はないか、腹 (Belly) 具合はよいか、下痢 (生鉱下り) を起こしはしないか等を常に心配し、触診だけで体調を見抜かねばならない。最近では Computer の発達により、手抜き診断をする竹の子医者が増えてきたとか、高炉はしばしば彼らの誤診に悩まされている。

高炉は“藪”医者ならまだしも、“藪”にもならぬ

“竹の子”医者にかかるとは病状は悪化の一途を辿りかねない。温める所を一寸間違えば下痢を助長し、おなかを冷やし (炉熱の低下)、便秘させられてしまう。解熱の方法を間違えれば、出来物・はれ物を体内につくり、時によつては体外に吹き出すことすらある。やはり、高炉の診断医は最高の権威者であることを要求されている。

それもそのはず、高炉の中では豚 (pig iron) が飼育され、Monkey (出滓口、最近ではしばしば Cinder notch と言われる) から“クソ”(金クソ, Slag) を排出している。炉床には熊 (Ti-bear) どころか火とかげ (Salamander) まで生息しているのである。

おなかの具合を診断していたある部長級の医者が大きな生鉱下りを見て言った。「こつて牛」が下りていった。これじゃ、調子が悪いはずだ。」部長医者の診断を見守っていた竹の子医者達が驚いた。「なにつ! 牛だつて! 高炉の中には牛もいたのか!？」

高炉屋は獣医でもあるべきなのであろうか。

高炉屋ほど幅広い学問・知識を要求され、身につけている技術屋は他にはいないのである。

((株)神戸製鋼所中央研究所 稲葉管一)